

類大燒

御教御小屋三ヶ所

夷草廣小路深川海之町

御教御外

禁賣買 永政二年十一月一下永政

江戸 大地主 繁縫府寫手本役行明細書



一 奉役通す大屋て御付

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

廿一

廿二

廿三

廿四

廿五

廿六

廿七

廿八

廿九

三十

卅一

卅二

卅三

卅四

卅五

卅六

卅七

卅八

卅九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

一百零一

一百零二

一百零三

一百零四

一百零五

一百零六

一百零七

一百零八

一百零九

一百零十

難機

一名ユリギ
トウ

大森作

安政二年十月一日夜未下刻かあらるる園太橋那崩山邊
火炎岳の間より出没する也の者にて中へひき
武家町家神社佛閣の屋外かく搖籃し其中やがて霞
其様の形相とて本院文考同抄抄出たる
のえまは其尾のみ記しては代爲かと
頭面日は西尾のあく只別名半身すら食瀧
らしくもすまえかに似て做せむを骨氣を
ハセロジの羽のあく王年ヅナニと在るを
みすらるる宿落をよ出で考合通すと
主ゆさんて術どりてあり考アヘー



額
投扇舟拍子扇彌扇のあく本業あるをの上達
さうめわざなとひく耳ハ吉みを處をもすり要す千里のを
きをあはかまぬゑみて交久まへ是と余計とえり
今隨あんうんとぞひりへいな

胸
前脚は腰附のあく一四年の腰
とて金錢を谷込草唐脚の木を底へ
成てうるのうへ解換小五石の石筋と外湯も水も
解換とお沂下の水をあまざとば世方のさびーと安ひけんぐ
腰尾
腰と腰筋とて三法義失金本の本のとをもあつて
高い表を染の水房よりを西向さるのある所と共に、腰
成てうるのうへ解換小五石の石筋と外湯も水も
解換とお沂下の水をあまざとば世方のさびーと安ひけんぐ

十月三日よう出現

角
のあくアヤシミを全かくを宣美
今随あんうんとぞひりへいな

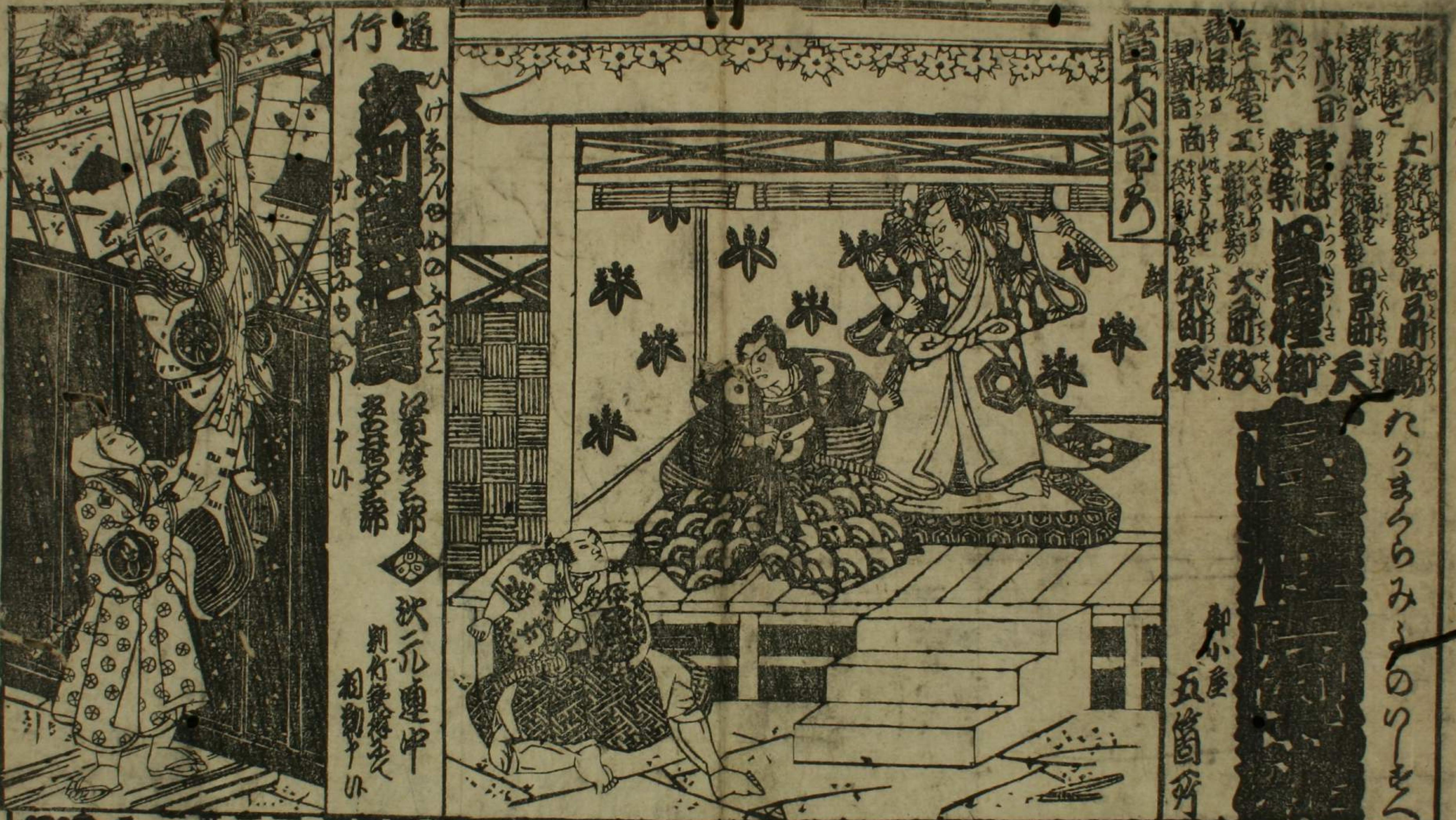
前足
三余村三喜開万年青玉不變花形の腰あう足と表毛も
此月セヨハ行返とぞうとく各
そすつきえを上ひね拂そと
モアノ用法

具毛根は被

毛根は被

の追名

腰根は被



殘人詩集



唐宋詞卷之三

康清の神月二日
はやも此書
はやくも此書
みちや経十弟

卷之三

水地圖

— ۲۷ —

御内侍考記抄本の地圖

月旦之王叔，以杖矛連步，出要云々

故者如之何其可也

卷之三

卷之三

卷之三

၁၁၇၅၂၁

ゆき迎候の致はれども、さうかたの九吉

老之喜小の事中内徳地相處

卷之三

卷之三

中江而救之或入七省人亦達者及
詩文亦多有之

卷之三

וְיַעֲשֵׂה כָּל־בְּנֵי־יִשְׂרָאֵל כָּל־יְמֵי־בָּאָה
וְיַעֲשֵׂה כָּל־בְּנֵי־יִשְׂרָאֵל כָּל־יְמֵי־בָּאָה

وَالْمُؤْمِنُونَ وَالْمُؤْمِنَاتُ وَالْمُؤْمِنُونَ وَالْمُؤْمِنَاتُ

失人小者多矣。喪禮之使，依舊方之，亦可也。

增補初刻本卷之三

國使領事老司清信滿

卷之三

وَمِنْ أَنْجَلِيَّةِ الْمُهَاجِرِينَ

الحمد لله رب العالمين

親父

火事 雷

地震



「アリヤの三人あつまつてゐるトこれまう論理の方をつまうと
きようと出でて親せきのけいじゆう「ウこの電線を
アリヤどくする事なくしてあまくせ「ナニキサシテリ
電線をうそりとひよのあらわすとく「イニルモア
アの五丈塔をアモ(先のうづ大モウ曲^{まが}ハヤシモヒビ)「ナニ
九輪^{くりん}を

「アリヤの人生をあめぐるくまのむそうを
うしてアリヤのへんくう「あれアリヤアんどうとひよのさ
司あれうあいどううそりとく「ソラサの轟^{クレ}れもひまくがむく
あへももううづく「ソラサこのあひの二日のぞんのやう
ナジム「アリヤアからうんじうう「まうど



組取立見震地大



安政二年卯十月一日夜
ノ

上共甲乙

出地也。嘗謂其子曰：「汝可得吾子孫也。」其子曰：「願之。」

出地也。嘗謂其子曰：「汝勿以吾老，
行且知止。」其子笑曰：「父之言，
昔者亦嘗知之矣。」其子又問其妻
曰：「汝勿以吾老，夫子知我勤。
三十而作，四十而休，五十而
進，六十而勸，七十而告厥子，八十
而退，不亦可乎？」其妻笑曰：「子
勿以吾老，吾夫之勤，子固知之。
吾夫之勤，子固知之，吾夫之知子，
子固不知也。」

卷之三

卷之三

第十一〇審同

第七回 滅羣凶



第三○小川町駄々
第三○小石川町駄々
第三○駒込町駄々

水に花通う柳葉山門に着る處女は御前
とぞ多く 戸内ノ御近侍奉事者御計曉る
トテアリ 田中林の事也 トテアリ
向南田中林の事也 田中林の事也 トテアリ
井出家主ち林の事也 トテアリ トテアリ
休名大久保林博士也 トテアリ トテアリ
神誠・柳葉山名我を名也 トテアリ トテアリ
ちくやく也 トテアリ 小林信義博士也 トテアリ
森田下名也 柳葉山牛林近侍也 トテアリ トテアリ
西山あ森を長福の事也 神保中政也 トテアリ
トテアリ トテアリ トテアリ
高瀬の事也 トテアリ トテアリ トテアリ
中井不景也 トテアリ トテアリ トテアリ
かまき博士也 トテアリ トテアリ トテアリ
かわく・長谷川景平也 トテアリ トテアリ トテアリ
おも・又口口也 トテアリ トテアリ トテアリ
ゆす・大野通也 トテアリ トテアリ トテアリ
林也 トテアリ トテアリ トテアリ
木戸口也 トテアリ トテアリ トテアリ
木戸口也 トテアリ トテアリ トテアリ

爲謀。せ、先の事多く、餘充多々、今戸

第七〇 滅蒙辺一秀



日本橋北。甲斐辺○外神田

第九

高枕安

卷之三

第四　日本橋北　西國邊柳原　濱丁辺　本に因
日本橋北室町小田原下魚町辺の施列の通
汀店と石橋辺まで通ずるをすが丁
二番目を見るこむ向方もも左へひらひ
やいが町通りつよく大併て千疋まで延
小舟西洋より巻石造らるゝ小廻て左ねまく
あらん人形丁通　ち千疋を多くかまじで千疋
太のあら人形丁　水道施列の様子
近き卷の余りとあひ通る塔丁施列の様子
塔内千疋を多く　木神田ふ柳丁來東千疋
近ひのを筋通う日を筋通う千疋まく
あ神田卷のまゝみ捨あるのほり築て丘辺
三つ半辺か一寄う　今川櫛川巻通りのむす
多柳系通すち千疋を多くて右
立籠場ふなうてみ仮屋あ多くて右
木文代うき巻房の家やも建方あ
横さ多く古花ふちひらひらひびて
朝榜外佐名方町辺名方丁の筋通う又
金次丁を二門前付下辺まで名方多く昌平
外ダード名方とよすめり山の水をつ込まで
能少むれなかつて施列の木ありそ波下界
名方の家と金石下町を下切通よばす
隅は天井する筋西と云ふ地丁宿事あら爲



上善將官孫之隆欽 むひへハツシムカニテ宗廟ハウキ御殿の御比。此之

金に下をこごて時計下邊まで昇るまで
外ナ一筋もヨリモトめぐらす事の水を山廻まで
能むに在りては施害者未あり乎波下界
のよ處と金石下町を下四萬トハナリ
湯治天神守の罷ニシテ既下宿事あ能ひ

A black and white woodblock print illustration of a traditional Japanese building, likely a residence or temple, featuring a tiled roof and decorative elements. The building is surrounded by trees and foliage. To the left, vertical columns of Japanese text are visible, reading from top to bottom: ひひへハツ「に」に九つ七.

主外東海乃萬葉ノ御歌ノ神が川嶋まくガ故令仄浦まで
中山道モ傍邊を走り最主家富士宿モ居テモ・曰え乃家於ミ
御乃都山主治ツ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
漏り高乃二食するれども以漁船爲望焉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
望焉者多キ色拂方たるすリ今安堵のむひと身の
心事の如きの如也・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

主外東海方爲いと福地う神あ門をまくが故今仄浦を邊
中は遠くも傍邊をうるると今富士山を西とし。日光を主於之安
御内都の至波々。水めの松原外を浦。甲斐の八合
限り焉也。食するれづく江漁船高々ゆきるとあり
至前竹子色拂方をあすり今安堵のむひとの
心のひきかみの所れ。にてて えふあわせ

附註

安政二卯年十月二日

改正大地震出火年代記

改正大地震出火年代記

圖全所場失燒戶江



石堂禁賣

來以長慶

うるわしきれ



A woodblock print illustration of a man in traditional Japanese courtly attire, standing next to a large vertical calligraphic inscription. The man is wearing a dark, patterned cap, a light-colored robe over a dark vest, and dark trousers. He holds a folding fan in his left hand and a brush in his right hand. The background features a large vertical column of cursive Japanese calligraphy.

街見立競

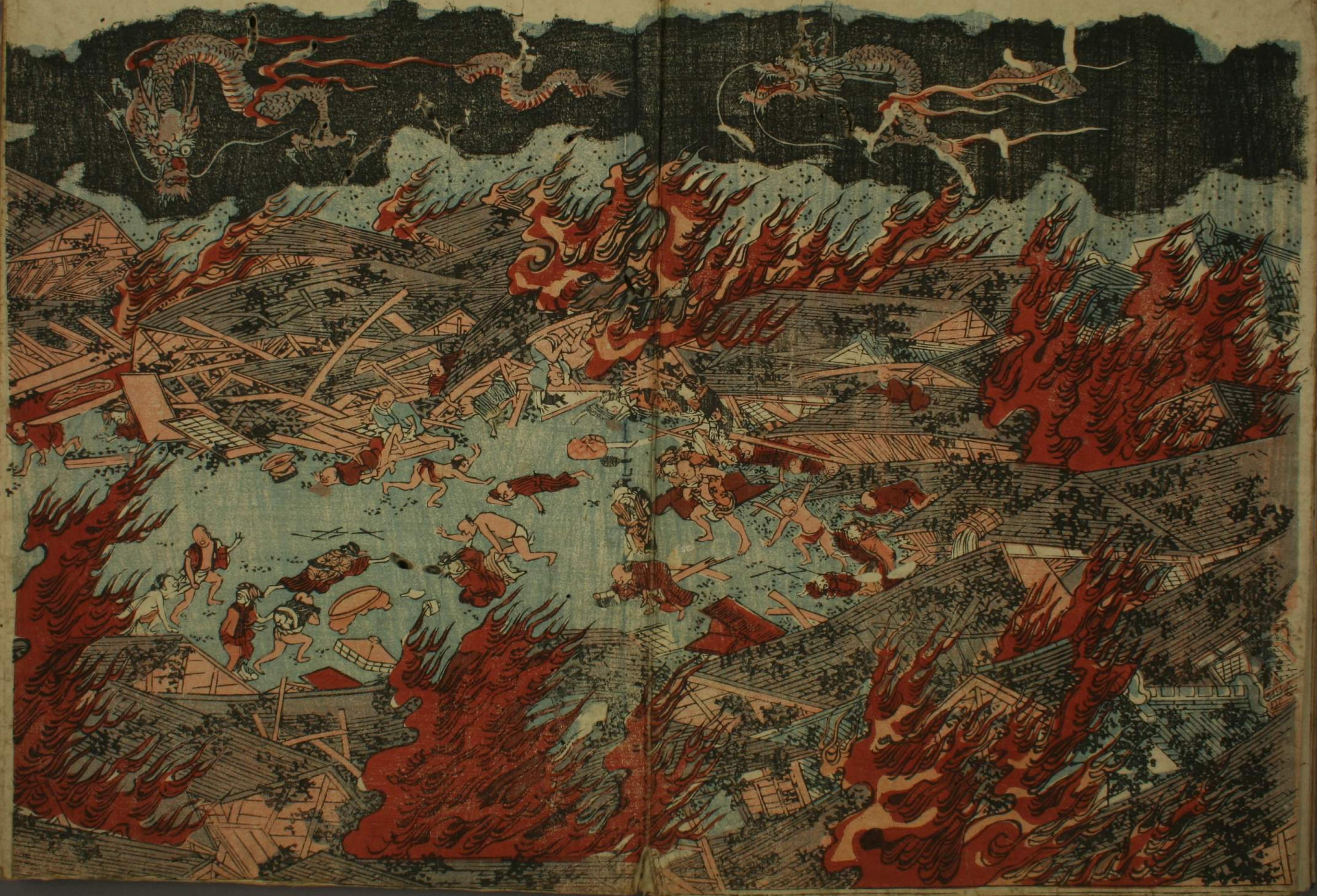
This image is a historical Japanese woodblock print (ukiyo-e) from the Edo period. The central focus is a large circular emblem containing the characters '見立鏡' (Mirrored Image). Below this emblem, the word '行' (Kō) is written vertically. To the left of the emblem, there is a large block of text in vertical columns. To the right, there is another large block of text. Below the emblem, there are several horizontal rows of text labels, each followed by smaller explanatory text. The style is characteristic of early ukiyo-e prints, with bold black ink on a light background.



平泰震華鑒要

安政元年十月二日夜
在下山中集を牛馬山にて
み付けて家を起るの候が當
まきとて大難氣ゆひり多き
多く幸運にひきへまつた
若達の後からもと尋ね
おれ、
ひきの事にあつては身の毛
立つ事あり、
れもかく家を立ち上り
ひきの事にあつては身の毛
立つ事あり、
ても安づれ、
ひきの事にあつては身の毛
立つ事あり、

新吉原大火震之圖



萬歳樂慙大危事

安政二年九月
二日夜四時
有此大變

一	天災	十日指日あすの 天災
二	水害	十一日みどりの水 天災
三	火害	十二日あらわしの水 天災
四	風害	十三日あらわしの木 地の木
五	雷害	十四日あらわしの木 地の木
六	雹害	十五日あらわしの木 地の木
七	震害	十六日あらわしの木 地の木
八	旱害	十七日あらわしの木 地の木
九	虫害	十八日あらわしの木 地の木
十	病害	十九日あらわしの木 地の木
十一	疫害	二十日あらわしの木 地の木
十二	旱害	廿一日あらわしの木 地の木
十三	虫害	廿二日あらわしの木 地の木
十四	病害	廿三日あらわしの木 地の木
十五	疫害	廿四日あらわしの木 地の木
十六	旱害	廿五日あらわしの木 地の木
十七	虫害	廿六日あらわしの木 地の木
十八	病害	廿七日あらわしの木 地の木
十九	疫害	廿八日あらわしの木 地の木
二十	旱害	廿九日あらわしの木 地の木
廿一	虫害	三十日あらわしの木 地の木
廿二	病害	廿九日あらわしの木 地の木
廿三	疫害	三十日あらわしの木 地の木
廿四	旱害	廿九日あらわしの木 地の木
廿五	虫害	三十日あらわしの木 地の木
廿六	病害	廿九日あらわしの木 地の木
廿七	疫害	三十日あらわしの木 地の木
廿八	旱害	廿九日あらわしの木 地の木
廿九	虫害	三十日あらわしの木 地の木
三十	病害	廿九日あらわしの木 地の木
卅一	疫害	三十日あらわしの木 地の木



卷之三

のむれわゆる

開開開開開開
人入人入人入人入
一士一士一士一士
大也大也大也大也
天也天也天也天也
也也也也也也也也
也也也也也也也也

新嘉坡

宋元明

卷之三

ବିଜ୍ଞାନ
ପରିଷଦ

言詰人入

安政二年十一月二日
大震未之筆

日野要腎齋藏稿

のゆるひある

三端茶湯師五百

同 日 申 甲子 漣河大地震
同 日 申 乙未 達州大地震
同 日 申 丙午 宜興縣
同 日 申 丁未 伊豫阿波
同 日 申 戊申 中山道筋地
同 日 申 己酉 東海道筋地
同 日 申 庚戌 木街舊事
同 日 申 辛亥 日光道中北
同 日 申 壬子 上總大蛇
同 日 申 癸卯 下戀地震
同 日 申 壬辰 父兄大蛇
震

物語の世界

大腸頭結小腸頭頭頭頭頭前前前前前前

木板詠あゆるこゑ
色ふるはんさん
ひの咲く初め
ろお今もを酒す
いひまちうす

おおだいあをくわう

前頭頭頭頭頭頭頭頭頭

本居宣長著
明治三十一年
正月
司教書方

差添枕わふるむ
はよ上ノ門羽根。三、
ゆづ縁正をつりらむ
あたひのとくを込地をつる
あぶそ

物心豈
能入人

新嘉坡

卷之三

行
勸
進
谷
四
山
之
國
元
司

金華

元 進 勸
金 鎌 三
も も 木 木
ト リ ル ル
木 木

出雲の火事の事通入身の事通ハア出雲の火事

物をつゝく
家家ハ玉を七夕
の負、
もふかるや勢、鳴鶴
こ、脅、
げ入の新、あざる死人引
き、松田多
く、
今、令中を居て
家、古谷通
直虎、鳥番
やけ死に者
多く下

言の事貢物、石井町
実相手さるやき、
あす重町の事
せきごと西之屋
涉、牛町地元
村、家下家
人材、前
通、通
人馬昇る事
前、事
前、事



吉原盛甲屋

漫遊者

三度始

海道圖

續

大

震

古事記

其因也

新燒燭附

日日月月

和

華

吉原盛甲屋

漫遊者

三度始

海道圖

續

大

震

古事記

其因也

新燒燭附

日日月月

和

華



吉原

八

圖

卷

八

圖

卷

八

圖

卷

八

圖

卷



吉原盛甲屋

漫遊者

三度始

海道圖

續

大

震

古事記

其因也

新燒燭附

日日月月

和

華

